富永さんの思い出

2019 年 5 月 26 日

飯田　哲也

富永さんとの交流がはじまったのは富永さんが 58 歳、私が 53 歳の時でした。5 歳年上の先学でしたが、富永さんはすでにかなりの研究業績があり、晩生な私は単著 2 冊に若干の編著・論文がある程度で、社会学界では無名に近い存在でした。ある学会大会での河村望氏の紹介でしたが、富永さんは気さくに話されました。私はすっかり引きつけられました。率直に言いますと、東大の先学とはかなり多く面識がありましたが、私立大学畑しか歩いていない私にたいしては、大抵は「上からの目線」での接触でした。河村さんはそうでない数少ない方でしたが、富永さんも無名に近い私に対等に会話してくださいました。「東大にもまだこんな人がいるんだというのが最初の印象でした（だから「富永先生」ではなくて私にとっては「富永さん」なのです）。

その後は、学会大会で会うとかなり長い時間会話をしました。お互いに著書を送り送られました。加えて、富永さんから時々手紙もいただきました。私たちは手紙による交流がまだ残っている世代で、富永さんは手紙を書くのが嫌いではなかったようです。富永さんと私が親しいことについて、「パーソンズ系の富永とマルクス系の飯田がなんで親しいのだ」と不思議がるという社会学者もいました。日本社会学界の一定の人の悪いところだと思います。理論的立場が大きく違うから親しく交流しないというのはおかしなことだと思います。

富永さんとの会話や手紙には 30 年ばかりの思い出がたくさんありますが、皆さんがあまりご存じないであろうと思われる思い出を若干書かせていただきます。

富永社会学についてはほとんど周知のことであり、「集い」でもいろいろと話されると思われますので、私が語ることはないと考えます。富永社会学理論の私の受け止め方については、私の単著『現代日本の社会学史』（学文社 2014 年）にやや詳しく書きましたので、関心のある方はご笑覧ください（146〜149 ページ）。富永社会学をめぐって一言付け加えてさせていただきます。私の知るかぎりでは、『社会変動の理論』に若干の論文を読んだ程度で富永社会学を決めつける人がいますが、大きな間違いです。比較するのがいささかおこまがしいかもしれませんが、富永さんと私の共通点は、社会変動の理論を求めて＜ミクロ−マクロ＞リンクを追求したことではないかと思っています。

さて強く記憶に残っている思い出を富永語録的に。

私が 60 歳の時でした。「飯田さん、社会学者は 60 代の時にもっとも仕事ができると思う。なぜなら、かなりの蓄積があり、体力も残っているからです」。事実としても、富永さんも私も 60 代に多く仕事をしたようです。つまり、50 代までにいろいろ

と蓄積（＝インプット）しておくことと健康であることが大事だという意味です。

富永さんのすごいところあるいは尊敬すべきところのひとつについて、富永さんとの会話では、「今、こんなテーマに取り組んでいる」という話がかならず入ります。社会学者の会話としては当然のことですが、その 1 年か 1 年半の間にかならず本になること、私もそれを見習ながら追っかけていました。社会学者（だけではなく）には、今取り組んでいることが曖昧であったり、書く「つもりだ」という言だけの人が結構多いように思われます。しかし、富永さんのようにきちんと成果が出る人はあまりいません。だから、「富永さんはよく書きますねえ」と私が言うと、「飯田さん、お互いに書くのが好きなんですよ。書かずにおれないこともたくさんあるから」と富永さん。

私が私の社会学理論をまとめ、単著『社会学の理論的挑戦』（学文社 2004 年）を書いたときに、「遅ればせながらようやく書き上げました。多分あまり売れないでしょう」と言うと、「飯田さん、売れないのは時代ですよ。僕の本もそうだけど、2,30 年前だったら若い人はこぞって買ったと思うね」と。要するに、最近の若い人（学生を含む）が本とりわけ理論書を読まなくなったという話です。

やや私の自慢に受け止められることを承知で付け加えます。2000 年前後だったと思いますが、戦後日本の社会学でマルクス主義の社会学の主要な文献について問われたことがあります。むろん私の知る限りのことを答えましたが、「東京に沢山の知り合いがあるのにどうして遠方の京都にいる私ごときに問うのですか」ときくと、「僕は飯田さんがわりと公平な人だと思っているから」と返ってきて、そう見えるかと思いました。

このような話は思い出として沢山あり、富永さんが京都へおいでなった時のことを省くわけにはいかないと思います。1990 年代に関西で私を軸にした良書を読む会を 10 年ばかり続けていました。可能なかぎり著者にも参加をお願いしていましたが、謝礼も交通費もなしです。今田氏の本を取り上げたこともあります（面識がないので参加をお願いしませんでした）。富永さんの本は 2 回取り上げ、一度、京都へきていただきました。その会の懇親会の後は京都泊、翌日は私の案内で、午前中は富永さんの希望である東寺へ行きました。昼食後は、私の好きな妙心寺へ案内しました。一般の観光ルートからはずれていますが、ここの退蔵院の庭園は絶品だと思っています（写真）。静かでやや幽玄であり、富永さんも気にいられたようでした。

もう 1 つだけ付け加えますと、富永さんの「世界旅行記」が送られてきて、非常に興味深く読ませていただきました。書くのが好きな富永さんの姿が示された文だと受け止めました。公表されたかどうかは私の耳に入っていません。私は今、未来論に取り組んでいますが、富永さんに読んでいただけないのが残念です。最後になりましたが、富永さんご冥福をお祈り致します。